

**会津坂下町 “坂下初市 奇祭・大俵引き” 行われる！**

1月14日、会津坂下町で“坂下初市 大俵引き”が行われました。私は、見物に行ってきました。私の普段からの品行方正によって、当日は雪ではなく晴れ（のち曇り）でした。会津坂下駅は、会津若松駅からJR只見線で約40分です。私は、行きは路線バスで、帰りは只見線を利用しました。混んでいて座れないかと心配しましたが、行きも帰りも座れました。こちらの人の多くは、バスや只見線ではなく、生活の交通手段は、自動車の利用みたいです。会津坂下町は、“坂下ラーメン”でも少し有名です。

“坂下初市 大俵引き”は、蒲生氏が会津を納めていた約4百年前に始まったといわれ、坂下を象徴する最大の祭りです。蒲生氏が坂下の繁栄を図るため、現在の町役場付近を中心に東西約900mの町割で市を許可し、毎年正月14日を初市と名付けました。寛永2(1625)年頃、市神様をまつり、2組に分かれた農民たちが米俵を争い、勝負に従って、米価の相場を定めたことがあったと伝えられたことが、大俵引きの始まりとされます。五穀豊穰・商売繁盛などを願い、米どころ会津を代表する祭りとなりました。

下帯1本の男衆が、上町（東）と下町（西）に分かれ、真冬の寒風積雪の中、大俵を引き合う姿は、勇壮そのものです。大俵は、長さ4.0m、高さ2.5m、重さ5tの長ジャンボサイズです。「上町（東）が勝てば米価が上がり、下町（西）が勝てば豊作となる」と言われます。

今年は、福島県内外から集まった110人の引き子が下帯姿で力を合わせて俵を引き合いました。引き子が100人前後での通常開催は3年ぶりとのこと。結果は、上町（東）が3本勝負の2本を制しました。その結果、米価が上がるので、農民は万歳ですが、消費者は大変です（それでなくても、私達の食料品や電気代の値上がりは物凄いの！）。どちらが勝っても、引き子は、1年間無病息災で過ごせるとのことです。

**会津坂下町は、演歌歌手“春日 八郎”の故郷**

会津坂下町は、演歌歌手の春日八郎の故郷です。春日八郎は、三橋美智也と同世代です。会津坂下駅前には、春日八郎の銅像が建っています。春日八郎（本名：渡部実）は、大正13年10月9日、会津坂下町塔寺に生まれました。戦時中（13歳の時）に、家計の負担を減らすためエンジニアを志して上京しました。そして戦後（22歳）、歌手になる夢を叶えるために東京に向かう汽車に乗り込み、ムーラン・ルージュ新宿座に入団して、歌手活動を開始しました。昭和27年、『赤いランプの終列車』が大ヒットしました。さらに『お富さん』のヒットで紅白歌合戦に初出場、演歌歌手の第一人者となりました。

春日八郎は、『別れの一本杉』を歌う時、少年時代を過ごした会津の風景を思い浮かべていました。「私はこの曲を、こころよくうたった。自分の血がうたっている、すなおにうたっている、肌でうたっている、裸の心でうたっている、人間的なフィーリングを精いっぱい吐き出している、そう感じた」（春日八郎の自伝『ふたりの坂道』）



【入場行進一上町（東）は赤のふんどし、下町（西）は白のふんどし姿で（会津坂下町）】



【大俵引きー「祭」の青の法被（はっぴ）は、女性の引き子】